

浅川伯教の朝鮮工芸論

李 尚 珍*

ASAKAWA Noritaka's Theory on Korean Folk Crafts

LEE Sang-Jin

abstract

The purpose of this paper is to analyze theories on Korean folk crafts by Asakawa Noritaka in colonial Korea, to investigate the process of his research and the content of his writings, and to examine the characteristics of his views on Korean tradition as well as Korea itself.

Asakawa Noritaka moved to Korea in 1913 and was captured by Korean traditional ceramic art. He spent the following fifty years on studying and researching Korean traditional folk crafts. He found it was crucial to maintain the succession of the Korean cultural tradition and argued that it deserved more respect by both Korean and Japanese people.

One of the prominent features of Asakawa Noritaka's theory is that it presumes a complete denial of Japanese colonial dominance. While dismissing the contemporary discourse insisting on Japan's cultural superiority, he instead discovered the very unique characteristics of the energetic Korean people in Korean traditional artworks. Another notable feature of Noritaka's theory can be seen in his respect for Korean cultural tradition and his emphasis on the eternity of Korean traditional folk crafts. Finally, the other feature of Noritaka's theory is its historicity : Noritaka examined the historical relations between Japan and Korea through researching Korean traditional ceramic art.

In conclusion, Asakawa Noritaka's theory provides us with a window to the further understanding of the history of Japan-Korea relations from the darkest colonial times to the present.

Key Words : ASAKAWA Noritaka, Korean Folk Crafts, the colonial period

I はじめに

1913年、「憧憬と興味」を持って朝鮮に渡った浅川伯教(1884～1964)は「関野貞¹⁾の報告書によって李王家博物館の存在を知り、伝を求めて渡鮮す²⁾といい、朝鮮に渡ってすぐに「李王家の美術館に通う様に³⁾なり、陳列されている朝鮮の工芸品を目の当たりにして、高麗青磁への関心を一層高めていった。しかし、価が高くて手が届かない高麗青磁のほかに、道具屋めぐりを通して李朝白磁に出会い、その親しみ易さから朝鮮伝統の美に気づくようになっていった。そして、朝鮮の工芸には、日本人が持っていない「尊敬すべき要素」⁴⁾が内包されていると考え、その中に「人情美」⁵⁾と「率直の美」⁶⁾の要素を見出し、朝鮮の工芸について本格的な研究に取り組んでいった。なお、伯教が「地理的にも歴史的にも処女地に等しい朝鮮が開放された」⁷⁾という日本による朝鮮植民統治の時代状況を認識していたことも研究を始める一要因になったことも忘れることはできない。

キーワード：浅川伯教、韓国伝統工芸、植民地期

*平成13年度生 国際日本学専攻

伯教は、「郷土固有のもの」・工芸品に関する芸術的・学術的な基礎を構築していくことを目的として、朝鮮の『世宗実録』、『輿地勝覽』、『経国大典』、『朝鮮古地図』などの史料を熟読し、1921年の調査開始から25年間にわたって、朝鮮全土の700カ所以上の窯跡を発掘調査するなど、文献調査と現地調査を通して研究を進めていった。このような基礎的研究調査の過程とその結果は、朝鮮と日本との歴史関係を考察し、相互理解の課題を解いていく一つの方法を提示するものでもあった。

伯教の朝鮮工芸への関心は、弟の浅川巧(1891～1931)⁸⁾と「白樺派」の柳宗悦(1889～1961)⁹⁾にも影響を与えた。巧は、朝鮮工芸に関する『朝鮮の膳』(1929年)と『朝鮮陶磁名考』(1931年)などの著作を著したことにとどまらず、朝鮮語にすこぶる堪能であり、朝鮮の人々と積極的な交流をも実践したことから、その業績は今でも当時の職場の韓国人同僚などの子孫に伝えられ、兄伯教により韓日両国の人々にも知られるようになった。

柳宗悦は1915年、浅川兄弟と出会い、1916年から1940年までに21回にわたって朝鮮を紀行しているが、朝鮮に暮らす浅川兄弟と異なり、朝鮮の工芸についての理解に限界を持っていた。それは、彼の初期の朝鮮工芸論の中で「悲哀の美」論を言及したことにある。後に「悲哀の美」論を克服して「健康の美」論へ変化していったが、浅川兄弟が一貫した朝鮮工芸論を展開していったことと対照的である。

巧と柳に関する研究はこれまでに数編が発表されているが¹⁰⁾、伯教については、彼が朝鮮陶磁器の蒐集家・陶芸家・彫刻家として名を馳せるとともに、茶道や俳句、短歌などにも才能を見せていたことを評価した内容に偏っている。その中で、高崎宗司は『朝鮮の土となった日本人-浅川巧の生涯』(草風館、1982年)の第2章に「朝鮮古陶磁の神様・伯教」を取り上げ、伯教の生涯と朝鮮における活動、戦後の状況までを多くの文献と談話を中心に分析した。また、赤岡武は1985年に「朝鮮陶磁器に生涯を捧げた人-浅川伯教を偲んで」(『徽典会会報』202号)と1989年に「浅川伯教-朝鮮陶磁器の神様」(『郷土史にかがやく人々』第17集、青少年のための山梨県民会議編発行)を発表し、伯教の朝鮮陶磁器研究を紹介している。そして、1988年に中村高志の『木履の人-浅川伯教・巧兄弟』(山梨日日新聞社)と1992年に江宮隆之編著の『山梨「人物」博物館-甲州を生きた273人』(丸山学芸図書)が発表された。それ以外に、伯教の朝鮮工芸に関する研究を分析したものはほとんど見られない。

では、伯教は朝鮮における研究活動を通して、どのような「朝鮮工芸論」を確立したのだろうか。本稿は、彼の著作の分析を通して、その「朝鮮工芸論」の特質を明らかにすることを目的とする。そして、当時の日本人に朝鮮の民族意識や伝統文化などを無視、否定する傾向が見られる中、伯教は「朝鮮工芸論」の中に朝鮮の民族・伝統の固有性についてどう認識していたのかを考察する。

II 朝鮮工芸論

伯教は、「工芸」とは人々の「実生活から生れたもので、その郷土の材料や習慣を土台として作られた製作品で、最も生活に即した」¹¹⁾ものとして、「もの」と「人」、「もの」と「自然」との関わりに注目しながら、当時の植民地史観に影響されることなく、自由な朝鮮工芸論を展開していった。特に伯教は朝鮮の工芸品に内在している「心の慰安と安定」の美しさ、「感情の暖かさ」、「人なつこさの美しさ」¹²⁾を自然との調和から見出し、その中に朝鮮民族とその伝統文化の固有性を追求していく姿勢を保ち続けた。

1 自然、もの、人

1921年2月の慶州石窟庵の旅は、伯教にとって、朝鮮工芸論の形成における出発点となった。伯教は、石窟庵内の仏像に照らされる自然の「光」の力に気づき、「外の光の具合によって、時に応じて色沢の調子が変わったり、影が流れたりして、不思議な静かさと美しさを感じ」¹³⁾ると指摘して、自然との調和によって生命力を発揮し続ける工芸の美に注目した。これは、伯教が朝鮮工芸研究を進めていく中、生涯一貫して持ち続ける観察力のもととなっている。伯教が朝鮮の自然と工芸品との調和に美の観点を求めていたことは、次のように彼の初期の著作に多く書き残されている。

朝鮮の空の蒼さは又特別に深い
彼等はそれを一日でも飽かず眺めて居る

これが青磁のモデルであつた
 一度焼ては空と比べた
 雨化天霽は最極の理想の色
 其色に時々ちぎれの雲が出る
 白鶴が飛ぶ
 そして雲鶴の青磁が出来た、
 これは彼等の心の世界の縮図である、
 夜の空は一層深い、
 そして星が手に取る様に近く見へる、
 この大きな銀象嵌の円屋根。¹⁴⁾

伯教は工芸品の中で、特に陶磁器への関心を高めていった。それは「東洋の文化は焼き物を地に残して、次から次へと移った文化であり」、「恐らくは人類の命数がつきて後にも其文化を物語るものは焼き物だ」¹⁵⁾と思うからである。そして、窯跡調査によって「窯跡や地上に捨られた破片は大抵の場合動かない（中略）雨があると（中略）石と砂だけは流れるけれども破片だけはくつついて段々地面が低下して来ても昔の儘にその跡に留る場合が多い（中略）その破片はその土地に留つてよくその土地の昔を物語つて居る」、「その破片が文献よりも遥かに確かな文化の交渉というものを物語っている」¹⁶⁾ことを確信して、陶磁器の破片蒐集に専念した。

伯教は朝鮮陶磁における中国陶磁の影響やそれとの比較にこだわることなく、李朝陶磁の固有性を健康の美として評価し、「形」、「色」、「線」、「模様」の特質に注目した。

形については、工芸品が作り出された時代の「伝統を重じ、古い型を最もよく残して」¹⁷⁾いるので、時代の世相と固有の民族性を読み取ることができると述べている。そして、その形が朝鮮の人々その姿を自由に表していると次のように述べている。

生命の力、合理、真理、愛、かうしたものをこの壺に見る。知らざる内に、日に日に美しくなつて行く田舎の処女の姿を思ふ。これは西洋の婦人の美しさでも無く、支那の婦人の美しさでも無い全く朝鮮の娘の美しさだ。

私はこの姿を見つめて居る、婦人の胴体を思ふ、首を思ふ、襟筋を思ふ、乳を思ふ、腹を思ふ、破れんばかりに下から張りつめた筋肉の豊艶さを思ふ。¹⁸⁾

伯教が論文を発表し始めた1922年は、柳宗悦が朝鮮の工芸研究における初期の「朝鮮の美」論に、侵略の歴史を反映するものとして「白色」と「曲線」を強調した「悲哀の美」を論の中心とした時期であるが、伯教は朝鮮の陶磁器を通して「線と色沢とが全く活きた、一つの象徴されたトルソーのやうに感じられました。口があり、首があり、肩があり、胴があり、腰があり、足があつて、推象された美しい人体だ」¹⁹⁾と述べ、その健康さを評価したのである。また、李朝末期の茶碗を例に挙げて、「高台が厚くなつて直線的」になっていることを指摘し、これが「朝鮮だけの線」であり、「同じ気持」で「壺や鉢や他の器」などが作られているという。²⁰⁾

伯教も柳宗悦のように、工芸品の「形と線の動きと云ふものは、その時代の気持が現はれて居る」とし、「外界からの文化の交渉に刺激されて、思想が変わると一緒に器の形が變つて行く」²¹⁾と考えたが、その民族の思想の根底をなすものとして、朝鮮の人々の暮らしにその視線を向けていた。1934年の論文「朝鮮古窯跡の研究によりて得られたる朝鮮窯業の過去及び将来」（『浅川伯教氏講述』中央朝鮮協会）より朝鮮の人々の暮らしに密着していた「巫女の思想」の影響についての記述が多くなって、1959年の論文「朝鮮民画の題材について」に、それを朝鮮の思想的特徴として取り上げている。

朝鮮には、巫という民族信仰がある。これは古くから深く婦人の胸中に宿り（中略）被術者の過去、現在、未来及びその家族、死人に就いても巫の心に乗ろうつり死人の心境、怨恨を語り出す（中略）怨霊が悪魔と

なりその家族を禍すると信じ、これを除くために一切の古きもの、人物の画等を取り去り、周囲を平明にし、そして白の一色にする。²²⁾

さらに、巫の影響によって『「かげ」というものを嫌い、なるべく何もない『無』に一つ落ち着きを感じ、素白に帰りたい』、「焼物でも、何時でも、白に帰ろうとする傾向がある」²³⁾と指摘している。朝鮮の巫は「生前の怨恨関係を死後の巫俗世界に期することによって、直接の復讐が避けられる」²⁴⁾という人間関係における永遠の感情を処理するという機能を持っている、そして、日常生活の中に死者を懸念し、清潔を強いられたことが「白色」を習慣的に好んでいくようになったと考え、また「白色」は身近い色であり、高尚な色でもあったと、伯教は見た。伯教は、庶民の暮らしの中から、このような「白色」の習慣を見出し、次のような見解も述べている。

朝鮮に来て、まず眼につくものは白衣である。白色は古代から彼等のあこがれの色である。(中略) 山は太白山、小白山、白頭山を崇め、李朝の王都は白岳を首座とし、鶏龍山の岩が白くなる時に、王都が其の処に移ると云うて居る。白衣の習慣なども決して近いものではない。²⁵⁾

白を模様の色彩に如何に用いられて居るかを見ると、高麗の無地の青磁に、白雲と白鶴とを象嵌して、雲鶴青磁という朝鮮のものとし、富貴を象徴した白牡丹を象嵌し、秋の野を飾る白野菊の菊象嵌とし、之れの白の部分も多くして花三嶋とし、遂に白磁に代る。²⁶⁾

白になれば一切無難、目出度い時も、悲しい時もただ一色で間に合うことになる。貴賤や財産の有無も、白一色であれば問題はない。古いものでも洗濯をよくして、折目を正しくすれば、いずれの処にも用を弁ずる。王公より庶民に至るまで白一色に落つく。門地とか、夫や妻の面目に関することはない。²⁷⁾

朝鮮の人は白を喜ぶ国民で、善良な人を形容して、「清白の人」といい、白についての認識と感覚が優れている。²⁸⁾

伯教は朝鮮の陶磁器やその破片の色の变化から「青から白にと進んで行った跡」を見出して、その白は「青味を帯びた白い」ものであり、「時を経るに従って白が勝ってしまっている」²⁹⁾とその生命力の強さを力説している。そして、朝鮮の人々の暮らしの中に、高貴な「黄」、莊嚴の「赤」、若さの「緑」、婦人好みの「紫」などの多彩な色彩を見出し、朝鮮工芸の特徴として捉えている。

さらに、模様は「時代の言語」であると説いて、時代の世相を読み取ることができるという。朝鮮工芸における模様について、中国大陸の影響を指摘しながらも、朝鮮独自の「自然に柔順な、人馴れのする姿」³⁰⁾になっていく様子を強調している。そして、時代の思想の影響に注目して、高麗時代は仏教の影響によって蓮の模様が多く、「形の持つ線が蓮の花や蕾から来て居」³¹⁾るとし、朝鮮時代になると儒教と道教の影響を受け、現世の幸福を願うように「寿福康寧」に関わる「松、竹、鶴、亀、岩、水、日、雲、鹿、柘榴、葡萄、桃、白雲、白鶴」³²⁾などが多いと指摘している。このような模様が「形に納まる空間の区劃と光りの調子」のバランスによって「近代的な構図」³³⁾を感じられると評価している。1956年の『李朝の陶磁』の中には、李朝染付の模様について、初期の瑞雲や蓮唐草、中期の葡萄・竹・梅、後期の秋草（蘭、撫子、桔梗、菊、花菖蒲、十字花）、末期の不老長生を象徴する十長生（日、月、山、川、松、竹、亀、鶴、鹿、不老草）などを特徴として取り上げている。このような模様は宗教に関わりつつ、人が自然の中で選び出したものでもあり、朝鮮工芸と自然との関わりの深さを表していると考えられる。

また、伯教は朝鮮工芸の中から、「作る人」と「使う人」の役割に焦点を当てて、分析している。まず、工芸品の製作の歴史から伝統の継承を読み取り、「朝鮮人は形や模様就ても佳いものを一度握れば決して其味を失はぬ様に、何回でも創作の心を失はずにやつて行く（中略）高麗から極く最近迄六七百年も続けて居るが、決して悪くなつて居らぬ」³⁴⁾と考えた。それは伯教の分析によると、朝鮮の人々が「絵画よりも彫刻に、平面よりも立体に、其製作上の天分を持つて居」³⁵⁾て、「朝鮮の人達がもつ工芸的才能及び技術が、独自の世界をもつてをる」³⁶⁾

からである。そして、朝鮮陶工が「其土地の陶土に適当した仕事で無理を利かさずに満足してやつて」³⁷⁾、「純粹の心で」「情味の勝つた」³⁸⁾ものを作るからである。さらにそれは、陶工の「全家族が子供まで行き連れて窯場に集る(中略)子供がひよろひよろ生土の鉢を抱へて地に出て並べる。一人の子供は板で釉薬をかき廻し、「夫人たちが釉の乾いた素地胚を入れて運ぶ」³⁹⁾という制作と生活との密着型の窯業が成り立っていたからである。

伯教は、工芸品が使う人によって完成していくと主張し、「使用する人は赤ん坊の知恵がついて行くのを喜ぶ様に、月日と共に変わって行くのを楽しむ。(中略)こうした茶碗は、使い込む事によって美しくなっていくので、(中略)生活と共に仕込んで行くものである」⁴⁰⁾と述べている。さらに、工芸の発達に必然的な要素としての使う人の役割についても、次のように述べている。

使うことによってその美を發揮し、しかもその使用者は、これを恰も家族の一人のように大切にするので、その器物はその農家にあつてますます大切な役割をつとめ、美はいよいよ増して来るのである。それで工芸の発達を図るということは、結局使用者各自の正しい趣味の向上ということが、最も大切な先決問題になる。使用者の趣味が進み、正しい工芸を要求すれば、そこに当然詭へ向の器を作る職工なり、あるいは農民の工芸なりが生まれ来るものである。使用者の必要さと使用者の趣味の高さから新しい工芸の世界が生まれて来る。⁴¹⁾

伯教は、常に工芸における「もの」と「人」との関係に注目し、「人間の心」と「器の心」が通じ合うことによって、工芸品の中に「人格的美しさ」が豊かになり、手仕事としての工芸が発展していくと力説している。

2 伝統の継承

伯教は1926年の論文「李朝白磁の壺」で、「西洋を見、東洋に覚めた姿の暗示、私の歩むべき第一歩を見る」⁴²⁾と述べる。彫刻家ロダンに心酔していて、西洋の芸術に関心を持っていた彼自身が朝鮮、東洋の美に気づき、東洋主義的思想を展開していった。このような東洋への回帰は、朝鮮の工芸を媒介とするものであった。

我々は色々のものを西洋から学んだ。光の美、音の美、人体の美、かうしたものに、真生面から突き進んで、自分を打ち込む事を教へられた。行きつまつた、偽善の衣を脱ぎ、裸体に来る事を教へられた。併しこれは西洋を模倣し複製する事では無い、その心で再び東洋に帰るべきだ。⁴³⁾

伯教の主張は、日本の朝鮮植民統治が近代化の下に工芸品の工業化・機械化を進めて、朝鮮の伝統の固有性が失われていくことを懸念し、伝統の継承の必要性を訴えるものであった。なぜなら、「手先の技術から生れた」⁴⁴⁾もの、すなわち「工芸品」は朝鮮の「人間の持つ資源」の一つであり、その資源をもととする生産には、ものと人の「永久性」が内在しているからである。この朝鮮固有の「地方的特色」を有するものを継承していくことは、「もの」のみならず「人」の存続に影響を与えていくのである。⁴⁵⁾

伯教は特に郷土の「固有」のものに対する執着を見せていた。それは、明治維新後の日本には西洋化・近代化に伴い、宗教・文学・美術を軽視する傾向が強くなり、その志向が植民地の朝鮮においても押し付けられていたことに対する抵抗であった。そして、伯教は朝鮮の伝統の継承が日本の植民統治に影響を受け、「今の内に研究しないと、皮相の文化は惜し気もなくこれ等の遺跡遺物をこわして行きつつある」⁴⁶⁾と、その現状と将来に対する懸念を表している。

そこで伯教は、自らの現地調査をもとに、朝鮮の伝統の継承におけるさまざまな問題や必要な要素を指摘する。まず、当時の盗掘などによる朝鮮文化財の損傷や紛失などの現状を認識し、「土から出たものは、一度商人の手に渡ると、史料としては、誠に其価値が薄いもの」⁴⁷⁾になると主張し、伝統継承のための一つの方法として、研究の必要性を訴えていた。

さらに、朝鮮国内における問題点として、「朝鮮の人達は、この土地に生れた工芸の美しさに対して、あまり尊敬と誇りとを有つてをらない」⁴⁸⁾ことを指摘し、その理由は朝鮮の人々の「謙虚」さにあると主張している。それは、工芸の作者の「社会的階級も最も低いもので(中略)作者自身も自から賤業に従事してをると自任してをって、ただ生活のために伝統を忠実にくり返したに過ぎなかつた」⁴⁹⁾からであるという。しかし、「周囲が比較的

無関心であること、作者が制作に対して特殊の個人的考案等をなさない為に、その結果は古い伝統を忠実に伝へ、材料を人為的に無理することなしに、「材料に忠実であり、伝統を重んじ、而もへりくだつた姿」⁵⁰⁾が完成・継承していき、「朝鮮の工芸が独自の立場を有」ち続けていると説明している。

そして、朝鮮の人々に「自己の周囲に誇るべき材料と生かすべき多くの手工藝」があることを自覚し続けることを訴え、次のようなことを主張している。

朝鮮の工芸に正しき活路を開かんとするならば、先づこの土地に生活する人々がこの土地の工芸に関心を持ち朝鮮の古くより現今に至るまでの作品に対して親しみを感じることが第一条件である。さうして、これを通して、民族に親しみ、その土地を理解し、その土地を愛するやうにしなければならない。⁵¹⁾

伯教は、工芸における「正しき理解者」「正しき要求者」「正しき使用者」の役割の重要性を強調し、「資本と機械による工業品と、手の働きによる手工藝との存立上の区別を明瞭に」⁵²⁾し、工芸の本質を明らかにしていくことを課題とした。伯教の追求する工芸の本質とは「健全にして永久性を有し正しい均釣を持ち使用すれば使用するに従つて美しさを益し、引ては生活の幸福をさへ感ずる」⁵³⁾ものであった。このような工芸の進歩のために、製作者の誇りと周囲の民衆の理解が必要であると述べていた。

伝統工芸の手仕事が少なくなつて、機械化の工業が発展していく状況に危機感を抱いていた伯教は、「工芸に基礎を置かざる工業は正しき発達をなし難い」⁵⁴⁾と主張し、工業と工芸の相違点について次のように指摘している。

工業は大体科学の力により労資関係から画一に多量の生産を為し利益を主体とし人間の手を省く事に成功した。然るに工芸は個人の名を重んじ資本の多きを要せず、美を重んじ機械製品に比し生産少く画一をさげ、作者の精神を打ち込み人間生活に潤ひのあるものを作らむと勉める。⁵⁵⁾

そして、当時の工芸が、機械工業に対立し、「民藝・手工藝・家庭工芸」などの広い範囲に用いられるようになっていくと説き、工芸と経済的効果との関連について以下のように提言をしている。

工芸は沢山の田舎の人の遊んでいる手を働かせる事が出来、小銭を小部落に動かせる事が出来、その資本はいりません。陶器ばかりではありません、原料と人とを求めて部落々々に小さな仕事を持たせる事は朝鮮としては今の内に考えねばならない大きな問題です。例えば役所にしても商工という課があれば、工業に属する部分を工業と手工芸又は副業という部に分けないとはいけません。⁵⁶⁾

3 日本工芸への影響

伯教は文献調査と現地調査の基礎研究を通じて、「政治的消長や思想の変化に依つて、形や相が^{すがた}変つて行く」ことに気づき、「その姿を通してその時代の歴史的状況を読む事が出来る」⁵⁷⁾ようになっていった。そして、その成果をもとに、朝鮮と日本との文化交流と相互影響についての分析を試みた。それは工芸品から歴史的資料としての価値を見出す試みでもあった。

伯教は工芸の発達変遷の原因として、中国の政治、朝鮮の民族生活、日本の趣味を取り上げて、その伝来について「支那から直接日本に伝はつたものは、あまりに大陸的である為か、我が国に育たない。一度半島に足を止めて伝はつたものは、その作者伝統がいつも我国に伝はつて生長してある」とし、朝鮮の工芸品は「冷やかさや強さ」と「一つの柔かさ暖かさを増して」⁵⁸⁾、日本の人々の気持ちに合うものになっていると論じている。

そして、特に陶磁器の茶碗をめぐる朝鮮と日本との歴史的背景を考察し、「五百年以前からの関係で、(中略)〔朝鮮から日本に〕実物が渡り、陶工が渡り、現今でも其時代の茶碗を愛用し、又その陶工の子供によつて今の陶業の盛況を来した」⁵⁹⁾と指摘している。それは、「日本人は作るより理解する事には中々よい頭をもつて居」て、「佳いものを見ると直ぐ感心して縛られてしまふ」⁶⁰⁾からである。伯教は、日本の昔の茶人が「朝鮮の井戸の茶碗は悟りの美しさ」があると評価し、「突き進んだ観賞、即ち修観」⁶¹⁾を持ち続けたことを評価している。日本では茶道

が一般に広がると共に茶碗についての関心が高まり、「厳粛の茶入れは支那人の作ったものを最上とするし、掌に乗せて幼児を抱くが如き心持で使ふ茶碗は、朝鮮の人によつて作られたものに求めた」⁶²⁾ことを認識していた。その様子について以下のように述べている。

現今我が国に保存されつつある数万金に値する多くの茶碗を見るにつけても、我が国民が如何に朝鮮の工藝を通じて朝鮮の人々に深い理解をもつてをつたかかを感じられる。而も一つの朝鮮茶碗が一国一城と取換えられるというような問題が幾度か起つておりことを聞けば、古き我が国民が、如何に朝鮮の工藝に対して、憧憬と好意とをもつておつたかは、現今我々が想像する以上であつた（中略）文禄の役後、各藩によって連れ来れし多くの朝鮮陶工は、現今における我が国の大部分の窯場の元祖である。さうしてこれらの子孫によつて、我が国製陶の現在の如き発達をみたのである。⁶³⁾

さらに、「単なる貿易関係からでなく、両国の国交問題の太い線の事件の証拠品とも考へられる」と指摘し、その一例として「礼賓手の茶碗は足利時代の外交の形見であり、御所丸や、金海や、熊川の茶碗は文禄慶長の役を物語り、御本系統のものは徳川時代の倭館の外交を物語る」⁶⁴⁾ことを挙げている。このような考察は、朝鮮全国の窯跡を歩き廻り、陶磁器の破片を蒐集し、丁寧に読み取る作業の結果として出てきたものであり、朝鮮工芸が日本に及ぼした影響のうちで、茶道と朝鮮陶磁器の関係についての貴重な資料となる。

しかし、「古い時代に品物は渡り書き付けまでであっても、茶人の四畳半から見た判断で、朝鮮の実際を知らないために一種の想像的独断」に過ぎず、ほとんど「事実が判っていない」ことを指摘し、茶碗の「表面観察」による「お茶の世界に限られた約束」、「観賞上の約束」、「伝説」ではなく「正しい歴史的材料」としての工芸品を調査・研究に取り組んでいく姿勢を明確にしていた。朝鮮の歴史を知ることは日本の古窯跡研究のための「本家」を知ることにもなるからである。⁶⁵⁾

伯教は日本の茶道と朝鮮の陶磁器との関係にこだわり、「朝鮮茶碗は作った朝鮮の人は無関心であったが、其作品を通して真の価値を見出し、之れを選択し育て上げたのは、日本の茶人であ」⁶⁶⁾ったと主張していた。そして「朝鮮茶碗は（中略）その時代の普通の食器」で、それが「日本で名器になつた」と指摘しながら、「生れがどうだからと云つても育てがよければ差支ない」⁶⁷⁾と、作る人より使う人の役割を強調した茶碗の「使用価値」について論じている。

ここで、朝鮮の人々の手で作られた茶碗が、まず朝鮮の人々の暮らしの中でどのように使われ、どのようにその価値を認識していたのかなど、使用者としての朝鮮の人々についての考察が見られない点を、伯教の朝鮮工芸論の限界として挙げる。さらに、伯教は彼自身が強調する工芸品の「真の価値」についての明確な定義をせず、「使用価値」と「美的価値」などに関する認識を示していない点も指摘しておきたい。

最後に伯教は、工芸品を媒介とする朝鮮と日本との関係について、古くから日本人が「焼物を通して理解して居る朝鮮の人達に対する好意と云ふものは、これは吾々の想像する以外の綺麗な気持」であると述べている。これは、日本による植民統治下の朝鮮に暮らす朝鮮日本人として伯教が、「作品と云ふものを通して、その人達の気持に好意を持つと云ふことが一番安全であるし、一番無難だ」⁶⁸⁾という、朝鮮の人々との交流のために得られた一つの方法論としても評価できるだろう。

Ⅲ おわりに

伯教は1913年から1946年まで、在朝鮮日本人として、朝鮮各地を廻り、朝鮮の人々の生活に直接触れ、体験をもとに「伝統の継承」の重要性、民族尊重の必要性に気づき、「朝鮮工芸論」を形成していった。

伯教の「朝鮮工芸論」の特徴は、第一に、朝鮮の工芸品が、朝鮮の人々によって自然の中から生まれ育つたこと、自然と人、自然とものが融合していること、を見出したことである。それは、また、朝鮮の人々の民族意識を否定する日本の植民地史観を批判し、むしろ健康的な朝鮮民族の固有性を見出したことである。

第二に、日本の植民政策によって朝鮮の工芸品の機械化・工業化が進み、工芸の伝統が軽視されていくことに伝統消滅の危機感を抱き、伝統継承の重要性と必要性を訴えたことである。それは、また、朝鮮の農村の経済効

果を計ることだけでなく、人による「もの作り」の「永久性」がその民族の存続と密接な関わりを持つことを訴えていたことである。当時、朝鮮民族の固有性が否定され、同化政策が実行される中、伯教の朝鮮工芸における永久性の主張は朝鮮民族尊重の精神が徹底していたからである。

第三に、工芸品の中の陶磁器の分析を通して、工芸をめぐる朝鮮と日本との歴史的関係を明確にしたことである。伯教は史料としての「陶器の相を読むこと」⁶⁹⁾によって「史的価値のあるもの」を見出し、特に日本の茶道界が作り上げた朝鮮茶碗の歴史観を「实际的に根底からやり直し」、正していったのである。それは朝鮮のみならず、日本における工芸研究の基礎を構築する作業でもあった。

以上のような朝鮮工芸論を展開していった伯教は、「長い習慣や伝統の異なる民族」の間に立つものは「美術」「工芸」であると主張し、当時の日本による朝鮮植民統治に対する時代的な限界を認識し、政治では解決できない両国の「真の好意と理解とは、美術や工藝を通じてのみ持ち得る」⁷⁰⁾と考えていた。

一方、「一国の心理を理解しようと思ふならば、芸術を理解するにしくはない」⁷¹⁾と、伯教と同様の主張をしていた柳宗悦は、1920年に「朝鮮の芸術よりも、より親しげな美しさを持つ作品を、他に知る場合がない」⁷²⁾と朝鮮芸術の「親しさ」を見出したが、1922年からは「白色」を、外勢の侵略を受け続け、「動揺と不安と苦悶と悲哀」⁷³⁾にあらわれる「悲哀の美」であり、その「色彩の欠乏」は「生活に楽しさを欠く」⁷⁴⁾証拠であると論じた。しかし、柳の「悲哀の美」論は朝鮮陶磁器の研究が進み、「朝鮮民族美術館」を開館し、庶民的な木工品などへの理解が深まるにつれて変わっていった。それに対して、朝鮮陶磁における「素朴さ」と「率直の美しさ」⁷⁵⁾を見出した伯教は、一貫した朝鮮工芸論を持ち続けていたのである。

【註】

- 1) 建築の歴史学者関野貞(1868～1935)は、日本政府の命令によって1902年から22回にわたって朝鮮に渡り、朝鮮の文化財や古建築、古跡などの調査を実施し、数多くの「韓国建築調査報告書」と15冊の『朝鮮古跡図譜』、『朝鮮美術史』(1932年)、『朝鮮の建築と芸術』(1941年)などを残している。関野克『建築の歴史学者関野貞』上越市総合博物館、1978年。
- 2) 高崎宗司『朝鮮の土となった日本人 増補3版』草風館、2002年、p. 38。
- 3) 浅川伯教『李朝の陶磁』座右室刊行会編、赤星五郎発行、1956年、p. 1。
- 4) 浅川伯教「朝鮮古陶器の研究に就きて」啓明会編・発行『朝鮮の陶器』1934年10月、p. 28。
- 5) 浅川伯教「工芸方面より観たる朝鮮 — 朝鮮伝統の工芸は深く憧憬し礼讃すべき独自の風尚を持つ」『朝鮮同胞の光』1934年3月、p. 137。
- 6) 浅川伯教「朝鮮の美術工藝に就いての回顧」『朝鮮の回顧』近沢書店、1945年、p. 274。
- 7) 浅川伯教「朝鮮古窯跡の研究によりて得られたる朝鮮窯業の過去及び未来」『浅川伯教氏講述』中央朝鮮協会、1934年8月、p. 3。
- 8) 浅川巧(1891～1931)は1914年に朝鮮に渡り、朝鮮総督府農商工部山林課林業試験所の雇員として造林の仕事に従事しながら、朝鮮の人々との交流を通して、朝鮮の伝統の美に気づき、多くの論文と著書『朝鮮の膳』(工政會出版部、1929年)と『朝鮮陶磁名考』(朝鮮工藝刊行會、1931年)を残している。高崎宗司『朝鮮の土となった日本人 増補3版』草風館、2002年。
- 9) 柳宗悦(1889～1961)は白樺派の同人として活動し、1914年に浅川伯教に、1915年に弟巧に出会い、朝鮮芸術へ関心を持った。1916年からはじめて朝鮮を訪ねた柳は、「朝鮮人を想ふ」(『讀賣新聞』1919年5月)を含む朝鮮関連論文を集めて『朝鮮とその芸術』(1922年、叢文閣)を出版した。さらに、1924年にはソウルの景福宮緝敬堂に「朝鮮民族美術館」を開館した。「民衆的工藝」を略した「民藝」の語を創った柳は、浜田庄司、河井寛次郎とともに1936年、東京駒場に「日本民芸館」を開館した。『柳宗悦全集 22 卷下』筑摩書房、1992年、p. 224-297。
- 10) 金子量重「柳宗悦と李朝 - 浅川伯教・巧の影響」(『月刊 韓国文化』1980年8月号)
李秉鎮「『白樺派』における他者としての〈朝鮮〉 — 柳宗悦と浅川巧の場合 —」2002年、東京大学博士論文、未刊行。
中見真理『柳宗悦 - 時代と思想』東京大学出版会、2003年。
- 11) 浅川伯教「農民工芸に就て」『朝鮮農會報』3号、1932年3月、p. 18。
- 12) 浅川伯教、「工芸方面より観たる朝鮮 - 朝鮮伝統の工芸は深く憧憬し礼讃すべき独自の風尚を持つ」p. 137-139。
- 13) 浅川伯教「朝鮮古陶器の研究に就きて」p. 27。
- 14) 浅川伯教「壺」『白樺』1922年9月号、p. 60。
- 15) 浅川伯教「朝鮮古陶器の研究に就きて」p. 32。
- 16) 浅川伯教「朝鮮古窯跡の研究によりて得られたる朝鮮窯業の過去及び将来」p. 6。
- 17) 浅川伯教「朝鮮器物の模様にて」『工芸』1934年3月号、p. 48。

- 18) 浅川伯教「李朝白磁の壺」『朝』1926年5月創刊号、p.2-3.
- 19) 浅川伯教「朝鮮古陶器の研究に就きて」p.27.
- 20) 浅川伯教「朝鮮古窯跡の研究によりて得られたる朝鮮窯業の過去及び将来」p.18.
- 21) 同前、p.8.
- 22) 浅川伯教「朝鮮民画の題材について」『民藝』1959年8月号、p.14.
- 23) 浅川伯教『朝鮮陶器の観賞』彩壺会、1935年2月、p.4.
- 24) 崔吉城著『恨の人類学』平河出版社、1994年、p.22.
- 25) 浅川伯教「朝鮮器物の模様について」p.49.
- 26) 同前、p.50.
- 27) 浅川伯教「朝鮮現在の窯業」『世界陶磁全集 第16巻』1958年、p.126.
- 28) 浅川伯教「李朝染付・鉄砂・白磁」『陶器全集第17巻』平凡社、1960年7月、p.16.
- 29) 浅川伯教「朝鮮古窯跡の研究によりて得られたる朝鮮窯業の過去及び将来」p.12
- 30) 浅川伯教「朝鮮器物の模様について」p.45.
- 31) 浅川伯教「朝鮮古窯跡の研究によりて得られたる朝鮮窯業の過去及び将来」p.12.
- 32) 33) 浅川伯教「朝鮮器物の模様について」p.49-50.
- 34) 浅川伯教「李朝陶器の価値及び変遷に就て」『白樺』1922年9月号、p.4-5.
- 35) 浅川伯教「鮮展雑感」『朝』2号、1926年6月、p.11.
- 36) 浅川伯教「工藝方面より観たる朝鮮 — 朝鮮伝統の工芸は深く憧憬し礼讃すべき独自の風尚を持つ」『朝鮮同胞の光』1934年3月、p.145.
- 37) 浅川伯教「李朝陶器の価値及び変遷に就て」p.4.
- 38) 同前、p.2.
- 39) 浅川伯教「明川の窯」『工藝』1932年1月号、p.100-102.
- 40) 浅川伯教『李朝の陶磁』p.11-12.
- 41) 浅川伯教「農民工芸に就て」『朝鮮農会報』1932年3月号、p.23.
- 42) 浅川伯教「李朝白磁の壺」p.4.
- 43) 同前、p.5
- 44) 45) 浅川伯教「産業門外観」『朝鮮及満州』1930年2月号、p.36-39.
- 46) 47) 浅川伯教「朝鮮古陶器の研究に就きて」p.35.
- 48) 49) 50) 浅川伯教「工藝方面より観たる朝鮮」p.141-142.
- 51) 52) 同前、p.146-147.
- 53) 浅川伯教「工藝の内容と我が国工芸の過去に就て」『朝鮮』1936年5月号、p.146.
- 54) 浅川伯教「工藝方面より観たる朝鮮」p.144.
- 55) 浅川伯教「工藝の内容と我が国工芸の過去に就て」p.119-120.
- 56) 浅川伯教「朝鮮古窯跡の研究によりて得られたる朝鮮窯業の過去及び未来」p.24-25.
- 57) 同前、p.4.
- 58) 浅川伯教「工藝方面より観たる朝鮮」p.145.
- 59) 浅川伯教「朝鮮古陶器の研究に就きて」p.29.
- 60) 浅川伯教「李朝陶器の価値及び変遷に就て」p.5.
- 61) 浅川伯教「朝鮮古陶器の研究に就きて」p.57.
- 62) 浅川伯教「工藝方面より観たる朝鮮」p.139.
- 63) 同前、p.136.
- 64) 浅川伯教「朝鮮古陶器の研究に就きて」p.29.
- 65) 同前、p.43.
- 66) 同前、p.56.
- 67) 浅川伯教「朝鮮古窯跡の研究によりて得られたる朝鮮窯業の過去及び未来」p.16.
- 68) 同前、p.26.
- 69) 浅川伯教「朝鮮古陶器の研究に就きて」p.54.
- 70) 同前、p.28.
- 71) 『柳宗悦全集 第6巻』筑摩書房、1981年、p.112.
- 72) 柳宗悦「朝鮮の友に贈る書」『改造』1920年6月号、p.10.
- 73) 『柳宗悦全集 第6巻』p.95.

李 浅川伯教の朝鮮工芸論

74) 同前、p. 105.

75) 浅川伯教「朝鮮の美術工芸に就いての回顧」p. 274.

(2006年1月10日受理)